

近世中国の伝統的幼児観と幼児教育に関する一考察

—近代幼児教育への影響を中心に—

聶 晶 晶

はじめに

筆者は、20世紀初頭における中国の幼児教育の近代化過程及び日本からの影響を究明する研究を構想している。本論文では、このような研究の前提として、近世中国の伝統的幼児教育の特徴の一端を究明することを課題としている。

20世紀初頭の清朝末期における幼児教育制度は日本のそれをモデルにして成立した。中国にはそれまで幼児のための教育施設は存在しなかったため、施設を設けようとした際、日本から多くのことを学んだ。しかし、日本の教育モデルを導入するにしても、それまでの幼児教育の伝統と深く関わり、伝統的幼児教育と融合しつつ、独自の教育を作りあげていったのである。例えば、中国史上最初の幼児教育に関する法規「蒙養院及び家庭教育法章程」には伝統的幼児教育の内容が残っている。また、中国の最初の公立幼児教育機関「湖北幼稚園」の教育内容にも儒教的内容が反映していた。このため、中国における幼児教育の近代化及び日本のそれからの影響を考察する前提として、伝統的な幼児教育、特に清代の幼児教育の特徴を把握する必要がある。

本論文に関係した先行研究として、加地伸行の「儒教における子ども観」⁽¹⁾があげられる。加地は儒教社会における子ども観や子どもの受けた教育について検討している。しかし、加地の研究対象は幼児から成年までと年齢の幅が広く、必ずしも幼児観を中心に考察するものではない。また、一見真理子は「中国における子ども、子ども観、子どもの権利」⁽²⁾を中心として、伝統社会の中の子どもや子ども観について分析している。しかし、一見は近代幼児教育への影響に関しては言及していない。

以上のような先行研究を踏まえ、本論文では中国の伝統的幼児教育観の特徴を考察し、ついでそれが近代幼児教育にいかなる影響を及ぼしたのかを明らかにしたい。本論文の検討課題は、第一に、幼稚園が中国に導入される前、儒教社会という中国（主に清朝期）における幼児観を明確にすることにある。第二に、幼稚園が導入される前に、子どもがどのような教育を受けていたのかを検討する。第三に、近代幼児教育制度が成立した際、すなわち日本モデルの幼児教育を受容した時、「伝統」と「近代」がどのように融合したのかを明らかにする。以上の検討によって、清朝末期における中国の幼児教育の性格的特徴を明らかにできると考える。なお、日本の幼児教育の影響は他の論文で検討するため、本論文は伝統的幼児教育が近代幼児教育に影響した点に絞って考察する。

1. 中国の伝統的幼児観

(1) 清代家族制度における家を継承する子孫

近代以前の中国は儒教の国とされている。清朝まで儒教は人間関係や生活の規範であり、特に漢の時代に儒教が国教化された。儒教が国教化された要因の一つとして加地伸行は、「宗教とは、死の不安に対して安心させる説明を与えうるものと理解できる。そして、その人に対して最も説得力ある説明をなし得たとき、その人へ入信の道を開く。同じく、その民族に対して最も説得力ある説明をなし得たとき、その民族に共通する幅広い国民的な宗教となる」⁽³⁾と述べている。

儒教は基本的な人間関係を君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友に分け、この関係を正しくすることこそが修養の目的であり、政治の中心課題であるとした。そして、君臣・父子・夫婦の関係を三綱（君は臣の綱、父は子の綱、夫は妻の綱）とし、国君・父親・夫の絶対的権威を保証した。この三綱五倫思想は人々の生活や意識に大きな影響を及ぼした。加地は「封建体制の清朝では、家父長が一切の実権をにぎることになる。清代の家族制度では、家族のもの一人一人が生活規範としての礼を守ると共に、家父長は召使いをも含んだ家族全員の行動に対して、絶対的支配権をもつ存在として君臨した」⁽⁴⁾と述べている。つまり、清代においては、儒教の三綱五倫思想が、家父長が権力を独占する家族制度を構成する大きな根拠となったのである。

では、家族制度を中心とする儒教文化では子どもをどのように扱っていたのか。

一見真理子は「儒教社会においての『子』とは、一般的に息子だけを指すのである。娘は将来嫁となって他家に入るため、一家の子どもの数に入らなかった。中国は男系相続制社会だったので、男性は家を相続でき、いつも重視される」⁽⁵⁾と述べている。家を永遠に維持するためには、子どもの存在が不可欠である。このため、中国では「多子多福」ということわざがある。男児の数が多いほど幸福であるとされた。子どもの最大の役目の一つは、家を継ぐことにあるといえよう。

(2) 先祖の霊をとむらう子孫

儒教文化における子どもに最も求められたものは「孝」である。『論語』⁽⁶⁾の中では、「弟子、入りては則（すなわ）ち孝、出（いで）ては則弟（てい）」⁽⁷⁾と述べられている。この意味は、若者は家庭にあっては親に孝行、世間に出ては年上を尊重することが、まず何よりも大切である、ということにある。全玖楽は、この点について、子どもが「主に『孝』といった縦の人倫を重んじる人間関係のなかに位置づけられた存在であったことを示すもの」⁽⁸⁾と解釈している。

儒教はなぜ「孝」を強調するかというと、「孝」は儒教が宗教として成り立つ根拠の一つだからである。龔書森は「儒家は祖先崇拝を、倫理の主要項目たる『孝』の延長として、宗教化を助長した」⁽⁹⁾と説明している。孔子は、「（親の）生けるには之に事（つか）うるに礼を以てし、死せるときは之を葬るに礼を以てし、（その後の命日に）之を祭るに礼を以てすべし」⁽¹⁰⁾という。親孝行は、親が生きている時だけ行うのではなく、親が死亡した後も、葬り、祭ることをしなければならない。龔によれ

ば、「親の霊を祭るのが『孝』である。祖先崇拜は、祖先の永生であると同時に、それはまた『孝』の継続でもある。それは『倫理化した宗教』であり、『宗教化した倫理』である」⁽¹¹⁾ということである。

ところで、中国人には、精神を主宰する「魂」と肉体を主宰する「魄」が存在しているという考えがある。その両者が一致しているときがこの世に生きている人間の姿である。儒教經典の一つである儀礼の書物『礼記』⁽¹²⁾のなかに、「魂気は天に戻り、形魄は地に戻る」⁽¹³⁾とある。肉体の消滅とともに魂は天上に魄は地下に分かれるのであるが、加地伸行は「魂と魄を呼びもどして一致させるならば、再びこの世に生きてもどることができるのである」⁽¹⁴⁾と解説している。人が亡くなるとすぐに、「復」即ち「たまよばい」（「招魂」）という儀礼を行う。この儀礼は余英時の「中国人の死生観」には、以下のように記されている⁽¹⁵⁾。

たまよばいを行う者「復者」が、亡くなった人の衣服を持って屋根の棟にのぼる。通常は親族がたまよばいをおこなう。復者はその服を振って、「ああ、（亡くなった人の名前）よ、戻ってくるのだ」と声をあげて、亡くなった人に向けてその名前をよびかける。三度、よびかけを繰り返した後で、復者は服を投げ下ろし、地上にいる人がこれを受け取って、遺体にかける。その後で、復者は屋根からおりる。「復」の儀礼が目的を達しえなくなったときになってはじめて、その人の死亡が宣言され、その後、寝台の上の遺体は埋葬用の布で覆われる。

子孫は葬儀を「礼」に基づいてきちんと行うことによって、祖先の魂と魄を呼びもどすことができる。加地伸行によれば、「これは『招魂』の理論化であり、祖先崇拜の理論化である。この理論で行けば、自分がこの世に再び帰ってくるができるには、まず、自分の死後、自分の魂・魄を呼びもどしてくれる招魂を行う子孫が存在することである」⁽¹⁶⁾とされている。すると、子孫を生み、その子孫によって祖先を祭り、再生を行うこと、その行為全体が孝となる。このような孝が行われることによって、死後の安心をえることができることになる。だから、子どもは「自己の死の恐怖や不安を解消してくれるものである」という考えになる。

そして、子の肉体は自分の血を分け与えたものであるから、子どもの存在は自己の存在の証し、さらに父母や祖先の存在の証しともなる。曾子の言葉によると、「身は父母の遺体なり。父母の遺体を行うに、敢えて敬せざらんや」⁽¹⁷⁾となる。以上のように、儒教においての子ども、もしくは子孫は親がこの世にいない時の存続と認識され、非常に大切なものだと考えられる。

2. 中国の伝統的幼児教育

(1) 清代の幼児教育思想

清朝時代の幼児教育の主な目的は三点あり、第一に人としての道徳を身につけ、第二には家を継承し、第三に科挙のために勉学するというものであった。これらの目的はそれぞれ古代中国における道徳教育、生活習慣教育、知識教育に該当していた。以下、これら三つの教育について古代中国ではど

のように考えられていたのかを分析する。

一つ目は道德教育である。古代中国の教育の中心となったのは『論語』『大学』『中庸』『孟子』の四書、『易経』『書経』『詩経』『礼記』『春秋』の五経であった。清朝になっても、教育内容はほぼ変わらなかった。清末の詩人王独清（1898～1940）は自伝『長安城中の少年 清末封建家庭に生れて』の中で、自分の家庭を「わたくしの家庭はこのように封建の高い土塀でわたくしをとり囲んでいた」⁽¹⁸⁾と回顧している。彼は上級階層に生まれ、家長の父親から教育を受け「かれ（父親）は早期教育を主張していたのであろう」⁽¹⁹⁾と父親を評していた。独清は4歳を迎えたばかりで勉強し始めた。自分が受けた教育について、独清は「父はわたくしの教育について、いわゆる『経学』方面を偏重した」⁽²⁰⁾と述べている。使われている教材は、具体的には『論語』『孟子』『易経』『書経』『詩経』『周礼』『儀礼』『礼記』『春秋』『孝経』などの「十三経」で、いずれも古代の教育内容と変わらず、人間生活の規範として仰ぐべき儒学の經典であった。

そのうちの一つである『論語』の中では前述したように「弟子、入りては則（すなわ）ち孝、出（いで）ては則弟（てい）」と記されていたが、全は「若者は家庭にあっては父母に孝養をつくし、世間に出ては年長者に従順であることがまず何よりも重要であり、儒教社会における幼児教育の核心であった」⁽²¹⁾と指摘している。つまり、幼児期の道德教育は「孝」を中心としていたのである。

二つ目の生活習慣教育の特徴は、男女を区別して教育することである。『礼記・内則篇』には次のように礼儀を教えることが説明されている。

子が物を食べられるようになると、右手を用いることを教える。ものが言えるようになると、男は『はい』といい、女は『はいい』という。男は革の袋、女は絹の袋を腰に下げて、手ぬぐいを入れる。子が生まれて六歳になると、数と方角の名まえとを教える。七歳になると、男女は同じ席に座らない。いっしょに食事をしない。八歳になると、門を出入りするとき、席について飲食するときは、必ず年長者のあとに従ってする。はじめて人に譲ることを教える⁽²²⁾

これによれば、10歳になるまでは、家庭において教育を受けたことがわかる。さらに『礼記・内則』には「九歳になると、暦を見て日を数えることを教える。十歳になると、男子は外に出て教師につき、外宿して、読み書きと算数とを学ぶ」⁽²³⁾という記述がある。これに対して女子の場合は「十歳になると、常に家にいて出ない。乳母はことばを穏やかにし顔色を和らげ、年長者の言うことをよく聞いてすなおに従うことを教える。麻を紡ぎ、蚕の繭から絹糸を作り、絹布を織りひもを編む。女の仕事を学んで衣服を供給する」⁽²⁴⁾と記述されている。男女において教育内容の違いが明確に存在していたことが窺える。

三つ目の知識教育の特徴は早期に子どもに知識を教えることである。例えば多くの典籍において、子どもが「学び」を始める年齢⁽²⁵⁾について述べられている。清朝の教育学者唐彪は『父師善誘法』においては「子どもが三、四歳になると、話すことができ、勉強することもできる。このときに、『千

字文』⁽²⁶⁾を書いた板を使って漢字を教える。毎日十字、あるいは五字を教えたほうがいい。（文字が多く分かれば、奨励を出す。）そして、文字を使って文章をつくる。賢い子なら、百日で『千字文』の中の文字が全部読める。『三字経』⁽²⁷⁾などの本を加え、一年で一、二千字が読めるはず。その後、塾に入ることができる⁽²⁸⁾と記されている。つまり、「学び」を始める年齢は3歳からという早期であることがわかる。

そのうえ、幼児教育の内容は独立しているのではなく、文字を教えると同時に礼儀も重視している。古代中国の幼児教育において使用されていた教科書は「礼」と関係している。例えば、『論小学』の中では「子どもが五、六歳の時、礼経の中の『曲礼』、『幼儀』など子どもに関する「礼」の部分を使い、三字、五字の押韻がある簡単な文章を作って子どもに教える」⁽²⁹⁾と書かれている。

（2）階層・年齢別の子ども観

伝統的儒教社会では男女差別は根強いので、子ども観を考察する際、男児と女児を分けて分析しなければならない。さらに、上層階級と労働階級の子どもでは全く異なった生活を過ごしていたため、ここでは上層階級の男児、労働階級の男児、上層階級の女児、労働階級の女児という四つに分類して子ども観を分析する。

最初に、上層階級の男児について検討する。これらの男児は幼い頃から儒学の古典教育をほどこされ、官吏登用試験という科挙試験に参加させられた。科挙に合格すると役人となり、経済的に富裕な地位を得て、一族の名声もあげることができる。したがって、子どもは小さい頃から両親や家族から大きな期待を受けて、強制的に科挙試験のための教育を受けさせられた。この点について加地伸行は、「清末の男児たちは、およそ四、五歳に達すると、金持ちの家であれば自宅に家塾をもうけて家庭教師を招き、そうでなければ（小地主や富農、町の中流商人の子どもは）私塾に通学して、科挙のための学習を始める」⁽³⁰⁾と記している。実際、清代の科挙試験には、10歳以下の子どもを対象とした「童子科」が設けられる。10歳以下の子どもで、五経のうちの一つと孝経と論語の三分野に詳しく、一巻ずつ暗唱し、十巻まで行った者には役職（俸禄が出る）を与え、七巻まで行ったものには「童子科出身」の称号（税金が軽減される）を与える。

儒教における教育目標は、五倫（父子・君臣・夫婦・兄弟・朋友）に示されているように、秩序を保つ人間関係のあり方を身につけた従順な子を育てることである。儒教の礼教主義は、児童少年向きの儒教入門書として広く読まれた『小学』によく表れている。全玖楽は「この『小学』は儒教倫理を集約したもので、教えの根本は日常生活で実践すべき五倫にあることを強調していることから、結局理想とされる人間像も『立志』を通して、聖人の教えを学び聖人君子たる徳を備える道徳的人間にあったのである」⁽³¹⁾と指摘している。また、子どもは親子関係における「孝」は何よりも大切だと説かれている。同じ朱子による幼児用テキスト『童蒙須知』も「孝」を強調している。『童蒙須知』の要約は下の通りである⁽³²⁾。

子どもは長上の命令に従い、恭しくすること、日常、衣服や机の周りを清潔に整え、起居すべてを端正にすること、姿勢正しく心を用いて丁寧に、繰り返し文字を読み書きし、覚えること、わいわい騒いだり、でたらめをいったり、召使いとはしゃいだりしない、無益なこと（球蹴り、球打ちなど）はせず、また喧嘩など危ないことには近づかないこと。

要するに、上層階級の子どもは礼儀と読み書きを幼い頃から教えられた。従って、一見真理子は「勉強する子ども像、文字文化に触れる子ども像は、上層の男児の専有物であった」⁽³³⁾と指摘している。

次に、労働階級の男児についてみると、上層階級の子どもと違って、早くから労働の担い手となって一家の生計を支えることが重要であった。中国は伝統的な農業社会で、農民が大多数を占めていた。前近代の農業は一定面積の土地に多量の労働を投入して、土地を高度に利用する農業経営であって、生産量が労働力の数と直結している。したがって、農作業をする人が多ければ生産にとって有利となる。加地によれば「男の人は農作業をするのが普通であるので、庶民の男児出生願望にも根強いものがあつた。男児は小さい頃から、畑に出て牛の世話をしたり草を刈ったりして大人の仕事の補助を始める」⁽³⁴⁾という。

『礼記』などの古典は知識人の読む本であって、庶民が読んでいたわけではない。庶民の中で、村塾に通った子どもはより通俗化した『三字経』を読むことになっていたが、『三字経』の内容は「あまりにも定型的な教訓ばかりであって、原始儒家たちが考えた宗教的孝、宗教的儒教からはほど遠く、倫理的な孝、倫理的な儒教の教科書」⁽³⁵⁾となっていた。

次に、女兒について検討するが、女兒は完全に知識世界から隔絶されていた。

上層階級的女児は、纏足の慣習によって家内に閉じ込められ、自由がない生活をしていた。『女訓』、『女戒』などの女訓書に基づき、嫁入りまでに儒教の「三従」の教えをほどこされる。「三従」とは、結婚前には父に、結婚後は夫に、夫の死後は子に従うということである。また、一般的に女兒は文字を教えられなかった。「才能がない女は徳がある」という言葉がある。この点について一見は「身体と頭脳を使うことから最も無縁な子どもたちが彼女らである」⁽³⁶⁾と述べている。

最後に、労働階級的女児について検討する。一見によれば、「貧困のなかで労働を担うことは無論、売買され、状況次第で口減らしのために、間引きされることも広くみられた事実であつた」⁽³⁷⁾という。伝統的な中国社会では、貧しい家庭がきわめて多いので、娘を「もの」として売ることがお金をもうける手段の一つでもあつた。売られた女兒は富裕層の家で下女として使役させられた。もっと残酷なのは、女兒を出産したあと、親が乳児を窒息死させるという習俗も存在していた。このように、下層労働階級的女児は「人」として扱われていなかったともいえる。

以上のように、儒教社会の封建中国において、上層階級の男児、労働階級の男児、上層階級的女児、労働階級的女児の4類型の子どものうち、上層階級の男児だけが学校教育を受けていた。それ以外の子どもたちは家事に従事したり、「親の所有物」として使われ、学校に通う機会がなかった。

3. 近代幼児教育への影響

では、中国の伝統的幼児教育は、その後導入された近代幼児教育にどのような影響を及ぼしたのだろうか。

1894年の日清戦争に敗北した清朝において、康有為ら変法改革派と張之洞ら一部の地方官僚は、日本の勝利の要因は明治政府が西洋教育・制度を導入したことにあると考えた。こうした中で幼児教育に着目すると、改革以前の中国では、上述したように伝統的な幼児教育が家庭で行われ、内容は礼儀、孝道に関するもので、儒教からの影響が大きかった。その状況に対して、張之洞⁽³⁸⁾は1898年に『勸学篇』を出版し、近代学制の導入、海外（特に日本）への留学生派遣、さらには書籍の翻訳を奨励している。清朝政府は、張之洞らの建議によって日本遊歴・留学奨励政策を採用した。

そして、1898年から1908年にかけ、張之洞袁世凱ら政府官僚の命を受けたり、あるいは自費により、日本を視察する知識人が続出した。彼らはその視察結果を報告書としてまとめたが、視察報告書『東遊日記』は20数編出版され、幼稚園を含めて日本の教育制度を紹介している。視察の内容は日本幼稚園の施設、教育内容（例えば「恩物」、「唱歌」）であり、特に儒家的教育内容「修身」を丁寧に記録した。紙幅の関係から、清朝における日本の幼児教育の受容については本論文では検討せず、別稿で行うことにする。このため、本論文では近代幼児教育への影響に焦点を当てて分析する。

日本を視察した知識人の一人に、京師大学堂の総教習呉汝綸がいる。呉は学制改革の任務を担当する管学大臣張百熙の命令を受け、1902年に日本を訪れ、教育視察を行った。呉の視察結果を元に、1904年、中国初の近代教育制度である「奏定学堂章程」が定められ、この中で幼児教育に関して規定したものが「蒙養院章程及家庭教育法章程」であった。

「蒙養院及び家庭教育法章程」第一章第一節には「蒙養家教の主旨は蒙養院をもって家庭教育を補助する。家庭教育は女学を包括する」⁽³⁹⁾と定められている。この部分では蒙養院の教育機関としての性格が定義されている。つまり、蒙養院は単に保育を行う場所ではなく、家庭教育を補助する機能も持つ教育機関として規定されていたことがわかる。「保母養成の学堂が急速に普及することができないゆえに、蒙養院を多く設けることができない。必要のある幼児教育は家庭教育に頼るしかない」⁽⁴⁰⁾と説明されていることからわかるように、蒙養院が家庭教育の補助として位置づけられた理由は、保母養成が困難であることから、蒙養院を多く設けることができなかったためであった。つまり、家庭教育を中心とした中国の伝統的幼児教育が依然として主流であり、蒙養院は家庭教育の補助にすぎない位置づけにあった。また、「蒙養院及び家庭教育法章程」で、保育項目の一つとしての「歌謡」において、その内容が「平易な小詩、例えば古人の短歌謡と五言絶句」と例示されている。この部分からは、中国の近代的幼稚園の教育内容が、従来伝統的な文化の影響を強く受けていたことがわかる。

1903年、中国最初の公立幼児教育機関「湖北幼稚園」が創立された。「湖北幼稚園」は日本の幼稚園をモデルにしたが、1904年の「蒙養院及び家庭教育法章程」の公布により、「武昌蒙養院」と改称し、清朝独自の儒教的保育内容が加えられた。「武昌蒙養院開園章程」における保育項目は「行儀、訓話、

幼稚園語、日本語、手技、唱歌、遊戯」⁽⁴¹⁾となっている。また、ほかの公立幼児教育機関も同様に、保育項目に儒教的内容が見られている。例えば、上海公立幼稚舎（1904年設立）の保育項目は「遊戯、談話、唱歌、手工、識字、温字、習字、図画、計算」⁽⁴²⁾の9つであった。さらに、湖南官立蒙養院（1905年設立）の保育項目は「談話、行儀、読み方、数え方、手技、楽歌、遊戯」⁽⁴³⁾であり、いずれも行儀、習字と算数などの伝統的な幼児教育の内容が含まれている。前述した伝統幼児教育の道德教育、生活習慣教育、知識教育の中でも「礼儀」、「習字」、「算数」などの内容が中心となっていた。

「行儀」は儒教的な「修身」のことであり、「湖南官立蒙養院教課説略」（1905年制定）では「行儀」を「子どもが良い習慣を身に着けるように、徳性を涵養することを教えるべき」⁽⁴⁴⁾と定めている。そこから蒙養院は道德教育を重視していたがわかる。しかし、近代的要素も若干見られ、例えば「数方」では奇数、偶数などの数字を数えていた。数学は近代科学と関連していて、清政府は近代科学の知識を持った人材を養成しようとしたと考えられる。

以上のように、中国の伝統的な幼児教育が近代中国の幼稚園教育に大きな影響を与えたことがわかる。言い換えれば、清政府は近代教育そのものの導入ではなく、中国伝統文化に基づいた幼児教育を目指したのである。

というのも中国の伝統的幼児教育は読み書きを中心とし、遊び中心の近代的幼児教育とは異なるものであった。その教育観に慣れ親しんだ中国の上層階級にとって近代の幼稚園教育への関心がないに等しかった。とはいえ、それは上層階級の教育観に過ぎない、中国の大多数の地域の普通の家庭は、依然として伝統的な子育てが行われていた。そうした伝統的な社会、大家族制度の中では、幼児教育の必要性はほとんど認識されなかった。佐藤尚子らは、「西洋幼児教育の受容は、伝統的な早教育としての幼児教育に対して、幼児教育独自の意味が理解されるかどうかという点にあった。しかし、中国では幼児期の教育に将来の仕事や身分を期待する思想からの脱却は、非常に困難なことであった。西洋幼児教育の受容は、子どもが豊かな人間性を持つことを期待する親の出現なくしてはあり得なかったと言えよう」⁽⁴⁵⁾と述べている。

終わりに

以上、本論文では清末中国における儒教的な子ども像の実体、伝統的な幼児に対する教育を分析した。すなわち、儒教における子ども（長男）の重要な役目の一つは、家を継ぐことであり、伝統的な幼児教育は主に家庭で行われていた。そして、幼児教育の主な目的は三つあり、第一に道德を身につけるため、第二に立身出世のため、第三に科挙のために、学ぶというものであった。これらの教育目的は、それぞれ古代以来の中国における道德教育、生活習慣教育、知識教育に該当していた。また、上層階級の男児と女児、労働階級の男児と女児の教育をそれぞれ概観した結果、社会の上層階級の男児は科挙試験に参加するために、礼儀と読み書きを幼い頃から教えられていたことが明らかになった。そして、上層階級の女児は、纏足の慣習によって家内に閉じ込められ、『女訓』、『女戒』などの女子教育書に基づき、嫁入りまでに儒教の「三従四徳」といった教えを学ばされていた。労働階級の男

兄や女兒は、文字で学ぶ機会をもたず、幼児教育を受ける機会がなかった。このように、従来の中国の幼児に対する教育状況は、階層、性別によって大きく異なっていたのであった。

日清戦争後の中国の近代化過程において、上述のような上層階級の男児を中心とした伝統的な幼児教育が近代幼児教育の成立に大きな影響を与え、中国初の近代教育制度「奏定学堂章程」や各地の蒙養院の規定にも反映した。すなわち、上層階級の子どもに対する儒教的な教育が基本となり、その上に日本から移入された遊具を用いた遊びを中心とした近代的幼児教育が一部採用されて、この時期の幼児教育が成立したと見ることができよう。

今後の研究としては、本考察を踏まえ、20世紀初頭における中国の幼児教育の近代化過程及び日本からの影響を究明する研究を深めたい。特に、日本からの影響について、1898年から1908年にかけて日本の幼児教育施設を視察した成果について、清朝末期中国官員と実業家の視察報告書を分析することにより明らかにしたい。

注(1) 加地伸行「儒教における子ども観」『岩波講座 子どもの発達と教育 2』1979年。

(2) 一見真理子「中国における子ども、子ども観、子どもの権利」(シンポジウム「世界における子ども文化の位置づけ」)、『比較教育学研究』19号、1993年。

(3) 加地伸行『世界子どもの歴史 9 中国』第一法規出版株式会社、1984年、7頁。

(4) 同上、145頁。

(5) 一見真理子「前掲」、171-172頁。

(6) 貝塚茂樹訳注『論語』、中央公論社、1995年。中国儒教の根本文獻。

(7) 同上、14頁、「弟子入則孝、出則弟」。

(8) 全玖楽「子ども観に関する比較教育文化的考察：近世（李朝、江戸時代）儒者の子どもの遊びに対する見解を中心に」、『大阪市立大学教育学論集』16号、1990年、26頁。

(9) 龔書森「中国的宗教・儒教・道教」『関西学院大学神学研究』40号、1993年、306頁。

(10) 貝塚茂樹訳注『前掲書』、35頁「生事之以禮；死葬之以禮，祭之以禮」。

(11) 龔書森「前掲」、307頁。

(12) 今井清、鈴木隆一『礼記』、集英社、1977年。中国儒教の経書で五經の一つ。

(13) 同上、126頁「魂氣帰于天、形魄帰于地（魂氣は天に戻り、形魄は地に戻る）」。

(14) 加地伸行『前掲書』、10頁。

(15) 余英時「中国人の死生観—儒教の伝統を中心に」『死生学研究』9号、2008年、21頁。

(16) 加地伸行『前掲書』、10頁。

(17) 今井清、鈴木隆一『礼記 下』、集英社、1977年、107頁「身也者、父母之遗体也。行父母之遗体、敢不敬乎」。

(18) 王独清著 田中謙二訳『長安城中の少年 清末封建家庭に生れて』平凡社、1965年、21頁。

(19) 同上、25頁。

(20) 同上、25頁。

(21) 全玖楽「前掲」、27頁。

(22) 今井清、鈴木隆一『礼記 中』集英社、1977年、197頁。

(23) 同上、198頁。

(24) 同上、198頁。

(25) ここで注意すべきなのは、中国古代に年齢をいうときには満年齢ではなく、数え年をいう。例えば、6歳は出生してから6年目で、実際は4,5歳しかない。つまり、子どもの勉強が始まる年齢は文章の中に書いた

年齢よりも1歳若いわけである。

- (26) 『千字文』は、子供に漢字を教えたり、書の手本として使うために用いられた漢文の長詩である。1000の異なった文字が使われている。
- (27) 『三字経』は、伝統的な中国の初学者用の学習書である。3文字で1句とし、偶数句末で韻を踏んでいる。平明な文章で、学習の重要性や儒教の基本的な徳目・経典の概要・一般常識・中国の歴史などを盛り込んでいる。
- (28) 唐彪『父師善誘法』、王雪梅編『蒙学要義』、山西教育出版社、1991年、200頁
- (29) 陸世儀『論小学』、王雪梅編『蒙学要義』、山西教育出版社、1991年、5-6頁。
- (30) 加地伸行『前掲書』、147頁。
- (31) 全玖楽「前掲」、27頁。
- (32) 加地伸行「儒教における子ども観」『岩波講座 子どもの発達と教育2』1979年、194頁。
- (33) 一見真理子「前掲」、171頁。
- (34) 加地伸行『世界子どもの歴史9 中国』第一法規出版株式会社、1984年、第13頁。
- (35) 全玖楽「前掲」、28頁。
- (36) 一見真理子「中国の子どもと遊び」、下山田裕彦、結城敏也 編著『遊びの思想：遊び理解と人間形成』、川島書店、1991年、95頁。
- (37) 一見真理子「中国における子ども、子ども観、子どもの権利」シンポジウム「世界における子ども文化の位置づけ」2011年、171頁。
- (38) 張之洞、清末の政治家。洋務派官僚として重要な役割を果たした。
- (39) 中国学前教育史編写組『中国学前教育資料選』、人民教育出版社、1989年、93頁
- (40) 同上、93頁。
- (41) 同上、103頁。
- (42) 同上、114頁。
- (43) 同上、107頁。
- (44) 同上、107頁。
- (45) 佐藤尚子・大林正明 編『日中比較教育史』、春風社、2002年、55頁。